

〔山槐記〕裏書 仁平元年十月十六日壬午、行事藏人縫殿權助賴業豫仰所司鋪設裝束、其儀二行對座、  
略○中西蔀懸垂布紺

〔倭名類聚抄屏障具〕帷 釋名云、帷音維、和名、圍也、以自障圍也、  
〔箋注倭名類聚抄屏障具〕孝德紀同訓、新撰字鏡鋪字亦同訓、按加太不復重之義、比良謂薄如葉也、

與枚訓比良同、帷所謂帳帷、几帳帷卽是、後謂禪布衣爲加太比良、本書內衣訓、由加太比良是也、俗  
以帷子字爲禪布衣、非是、略○中 按依釋名所云、則帷後世軍營施之自圍、呼幕者之類、非加太比良也、

〔段注說文解字巾七下〕幪帷也、釋名曰、幪、廉也、自障蔽爲廉、耻也、戶、幪施之於戶、從巾、鄭云、帷、以兼聲、力切、七帷在旁曰帷、周禮注同、釋名曰、帷、從巾、佳聲、清悲切、匱、古文帷、錯曰、從匚、

〔伊呂波字類抄雜物〕帷カタヒラ 幪

〔運步色葉集〕賀カタヒラ帷子左傳九、帷堂而哭、

〔新撰字鏡〕鋪金也、普胡反、陳也、遍也、布也、舒也、設也、加太比良、又已之、

〔後奈良院御撰何曾〕夏衣冬降にけり 加たびら

〔和漢三才圖會三十二〕帷カタヒラ 音爲 幪 同 和名加太比良 今云水引是乎略○中

按、本朝所謂帷、幕、帷、相誤也、所圖隨其誤耳、且又以衫衣爲帷子、事詳于衣類之下、蓋衫衣單布圍身體、似帷

之圍屋舍者、故假稱加太比良、竟失本乎、

〔東雅器用〕帷カタヒラ 倭名鈔屏障具に、釋名を引て、帷は圍也、以自障圍也、讀てカタヒラといふ

と注したり、カタヒラといふ義不詳、倭名鈔、浴具に、温室經論語注等を引て、內衣明衣並讀て、ユの字、讀てカタヒラといふもの、又倭名鈔に見えし幕マクといふは、其字の音也、又帟ヒラバリと

あり、すべてこれらの名義不詳、又帟ヒラバリといふは、周禮注に平帳曰帟之義也、幄アグハリといふは、小爾雅に覆帳謂之幄之義也、幔マダラマクといふは、本朝式斑幔之義也、幌をばトバリといふ也、凡帟帳之屬をハリといふは、釋名に帳張